明日のむこう

ホワイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
明日のむこう

【Ｎコード】
Ｎ６４９１Ｗ

【作者名】
ホワイト

【あらすじ】
一人の少年、佐倉洋一は子供のころを過ごした田舎にやってきた。そこで待っていたのは優しい祖父たち、かつてのおとなりさんで元幼なじみの物井天音、さらに転校先の学校の個性あふれる人々。そしてそこで繰り広げられる平和な、しかし波乱（？）に満ちた日々。彼がわざわざ不便な田舎にやってきた理由とは？　そして彼はそこで何を見出すのだろうか……

第1話　（From “Prelude C－dur”）（前書き）

この話は拙作「Ｐｒｅｌｕｄｅｓ」の第1話から生まれたものです。興味があればもともとのものと比較をしてみるのも面白いかと思います。

それではどうぞ

第1話　（From “Prelude C-dur”）

雲は青く晴れ渡った空を背景に、のんびりと流れて行く。
頬を撫でる風が心地よい。
景色は、思い出の中のものと大して変わらないままだ。

九月の上旬、俺は、俺が生まれてから小学校低学年までを過ごした町の駅に、八年ぶりに降り立った。
駅の周囲にはほとんど何もない。あるのは畑と、民家がぽちぽち、そして駅前の食堂兼売店だけだ。コンビニなんてのはもっての外、そもそもこの町にコンビニなんてものが存在するのかどうか疑わしい。まぁ電車が一時間に一本しかないような場所にそんなものを求めるのが間違っているとは思う。だが、都会から来た身にはこれから暮らす場所にコンビニがないというのは結構辛い。
「ま、グチグチ言っててもしかたない、か。」
とりあえず駅から出ないことには何も始まらない。ということでホームを見渡してみるのだが……
「改札口はどこだ？」
駅、と言ってもホームしか見当たらないのだ。とりあえずホームの端まで行くと、ポストのようなものが立っていて、そこにこう書いてある。

『使用済のきっぷはこちらに入れてください』

……駅員はいない。まぁそもそも駅員がいるような建物自体がないのだから当然といえばそれまでだが。

その箱に切符を入れ、駅の外に出る。改めて周囲を見渡してみるが、やはり何もない。いや、何もないがあるか……くだらない言葉遊びをしていてもしょうがないので、オヤジにもらった地図を出す。

「さて、じいちゃんの家にはどうやって行くんだ？」

地図をぱっと見た感じでは、駅のすぐ近くにあるように見えるのだが……よく見るとその途中の道の所々を波線が横切っている。さらに、その手書きの地図の右下の隅に『親父の家までは駅から6キロぐらいあるから、がんばれ☆』と添えてあった。

「……6キロだと！？　歩けってか！？　しかもロクに日陰は無いぞ！？」

まわりが畑しかないということは、即ち日陰を作ってくれそうなものが無いということである。さらに今日はこの上ない晴天だ。ありがたくないことに日差しは容赦なく降り注いでいる。

「……嫌がらせかよ……あんのクソオヤジ……」

悪態をつきつつも、地図を頼りに歩き出す。正直一刻も早くじいちゃんの家に着きたい。風は吹いていて涼しいのだが、荷物が多い上に、照りつける日差しのせいで余計な汗をかいてしまう。

しばらく地図に従って歩いて来たが、おかしなことに次の目印が一向に見つからない。おまけにどう贔屓目に見ても、建物の数が減ってきている。これはまさか……地図が間違っている？　つまり……

道に迷ったようだ……

「ちくしょう！　なんで地図間違えてやがんだ！　あのクソオヤジ！　だいたいどう考えても道を覚えてるわけがないやつを見知らぬ

土地に放り出して、手書きの地図を押し付けて『がんばれ☆』はおかしいだろ！」
だがどれだけ文句を言っても当のオヤジはここにはいないし、何か事態が好転するわけでもない。
「まいったな……」
とりあえずは道が分かりそうな人を探したい所だが、あいにく周囲に人影はない。仕方がないので、来た道を引き返すことにする。もしかしたら目印を見落としていた可能性もあるわけだし。
そして、来た道を引き返していく。だがどう見てもオヤジの地図に書かれている目印は見つからない。

「勘弁してくれよ……」
俺は途方にくれて、バス停のベンチに腰を下ろした。ちなみにこのバス停、一日に五本しかバスが来ないらしい。
そして、近くにあった自販機でジュースを買って、それを飲んでいると、不意に誰かに声をかけられた。
「……あの、もしかして佐倉《さくら》君？」
「え！？」
顔を上げると、そこにはこの近くの高校の生徒だろうか、制服を着た俺と同い年ぐらいの女の子が立っていた。
「なんで俺の名前を知ってるんだ！？」
「やっぱりよーくんだ～！」
「俺の質問に答えてくれ。」
「え～、わたしのこと覚えてないの～？」
改めてこの女の子を観察してみる。背丈は普通ぐらい、わりとスタイルはいい。やや長めの髪をそのまま垂らし、前髪はヘアピンで留めていて、くりくりした目でじっと俺のことを見ているこの少女は、間違いなく美少女の部類に入るだろう。　……けっこうかわいいな、だが……

「すまんが全く記憶にない。」
「が～ん……忘れちゃったんだ～……」
……知り合いにこんな愉快な脳ミソをしているヤツっていたっけか？
「隣に住んでたのに～……」

隣に住んでた……？

「……物井《ものい》か？」
「やったぁぁぁ！　思い出してくれたぁ！」
どうやら正解らしい……
「本当に物井なんだよな？」
「そうだよ～♪」
正直言うと、俺の記憶の中の物井《ものい》天音（あまね）は、こんなにテンションが高いやつでは無かったはずだ。
もっと引っ込み思案で、しょっちゅう泣いていた記憶がある。
「あの『泣き虫天音』だよな？」
「が～ん！　がんばって泣き虫は克服したのに～！」

女の子の目が潤みだした！

「だーっ！　泣くんじゃねぇ！　やっぱりお前は物井だ！　間違いねぇ！」
「うううう～、信じてくれた～？」
「この程度で泣くんだから間違いないだろ。」
「それで、どうしてよーくんがここにいるの？　そんなに荷物を持って。」
「オヤジの書いた地図が間違っててじいちゃんの家が見っかんねぇ。」
「そうなの？　地図見せて？」
「ほい」

物井に地図を渡す。
「それで、どこが間違ってるの？」
「この目印が見つからねぇ。」
「あ～、このお店はね～……去年潰れちゃったんだよ～……」
「そりゃ見つからないわけだ……」
「しかもこの道、遠回りだよ？」
「なんですとっ！？」
「このまま線路沿いに歩いて、途中で曲がった方がずっと近いよ？」
「ほんとですか！？」
「うん、だけど曲がる道がちょっと分かりにくいかな～？」
「そんなにか？」
「うん、同じ感じの道が多いから、すこし紛らわしいかも。」
「この地図はオヤジの思いやりがあったのか？　迷子にならないようにっていう……」
「そうなんじゃない？　お父さん優しいね。」
「だが間違ってたせいで何もかも台無しだがな！」
「あはは～、そうだね～。……それで、そんなに荷物がある理由は？」
「あー……まぁいろいろあってな、しばらくじいちゃんの所に厄介になるんだよ。」
「おおっ！　よーくんかむばっ～く！」
「……お前、英語になってねぇ。」
「ってことはまたよーくんがお隣さんに～♪」
「まぁそういうことになるわけだが……」
「あっ、つまりよーくんはおじさんの家に行こうとしてたんだ！」
「気づくの遅いよ！」
「よーし！　そしたらわたしが道案内してあげるよ！」
「……ちょっと不安だが頼むよ、なんせオヤジの地図は当てになんねえし……」
「まっかせなさ～い！　じゃあしゅっぱ～つ！」

そして俺は物井の後について歩き出した。
日は傾いているが、まだまだ日没までには時間がありそうだ。

第2話　（動き始めた時間）

「……やっと着いた……道案内サンキューな。」
俺は記憶の中にあるじいちゃんの家そのままの家の前に立っていた。
表札にはちゃんと『佐倉』と書いてある。
「どういたしまして～。」
「じゃあな。」
「うん、でも荷物置いたらすぐそっちに行くよ？」
「なんで？」
「せっかくだし、おじさんのところに遊びに行こうと思って。」
「……人ん家に行くときは先にそのことを伝えてからだぞ？」
「大丈夫！　いつも遊びに行ってるから！」
「よくねぇ！　……ったく、好きにしろ。」
「それじゃあまたあとで～！」
というわけで物井と一旦別れ、じいちゃんの家の門をくぐる。西日に照らされた中庭、古びた家が醸し出すどこか懐かしい雰囲気、幼いころ遊び疲れて帰ってきたときに見た、そのままの光景が俺を出迎えてくれた。そして、縁側には麦茶のコップを片手に涼むじいちゃんの姿があった。こっちに気づいて声をかけてくる。
「お～！　ずいぶん遅かったなぁ、洋一。」
「オヤジの書いた地図が間違ってたから道に迷った。」
「ははぁ……大方潰れた店でも書いとったんじゃろ？」
「大正解、さすがじいちゃん。」
「まぁ、そんなもんじゃろ。あいつが最後にここに来たのがもう二年前じゃからなぁ……」
「……いっそのことグー〇ルマップでも渡してくれればよかったの

にな……」
「まぁ気にせんでもええじゃろ、こうやってちゃんと来れたんじゃから。」
「……そういうところはオヤジそっくりだよなぁ。」
「失礼なことを言うな、あいつがワシに似たんじゃ。」
「……まぁ確かにそうだね。ところでばあちゃんは？」
「ばあさんなら台所じゃよ。お～い、ばあさ～ん！」
『なんですか～？』
「洋一が来たぞ～！」
「あらあら、いらっしゃい、洋ちゃん。」
「オヤジの地図のせいで大変な目にあったよ……」
「あらあら、それは災難だったわねぇ。どう？　アイスでも食べて休む？」
「そうするよ。」
そして、ばあちゃんが家の中へ入って行った直後、門の方から声がした。
『おじゃましま～す！』
早いな……物井……
「こんにちは、おじさん。」
「お～、天音ちゃんかい。いらっしゃい。そうそう、洋一が戻ってきたぞぃ？」
「実は知ってま～す！」
「おんやぁ？　おかしいのぅ？　確か天音ちゃんには言っとらんかったと思うんじゃが……」
「わたしが道案内してきたんです。」
「なるほど、そういうことじゃったか。それはありがとう。礼といってはなんじゃが、アイスでも食べるかい？」
「それじゃあお言葉に甘えちゃいます。」
「お～い、ばあさ～ん！　天音ちゃんの分のアイスも持ってきとくれ～！」

『分かりましたよ～』
そしてそのすぐあと、ばあちゃんがアイスを持って出てきた。
「いらっしゃい、天音ちゃん。」
「おじゃましてま～す。」
「ほら、どうぞ。」
ばあちゃんが俺と物井にアイスを手渡す。それはどこでも見かけるようなカップアイスだった。
「いただきます。」
「いただきま～す！」
しばらくアイスを食べながら、話をする。
「洋一、それを食べ終わったら物井さんのところに挨拶に行ってきたらどうじゃ？」
「なんで？」
「またこっちに戻ってきたんじゃから、顔を出しておいた方がいいと思うんじゃ。」
「……わかった、物井、後でお前んちに顔出すから。」
「おっけ～、ちょうどお母さんがいるから大丈夫だよ。」
そして、アイスを食べ終わったので物井家に顔を出しに行くことにした。ちなみに、この佐倉家のお隣さんは、物井家一軒だけだ。佐倉家の家は、北側に物井家があるほかは、東にちょっとした林（どちらかというと屋敷森に近い）があり、それ以外は畑、という何とも寂しいところにある。物井家の向こうにはまだ家が続いているので、周囲にまったく人がいないわけではない。もっとも物井家とは反対側の、畑の向こうに見える家までは優に３００メートルはあるだろうから、そっちを見れば家はないと言えてしまうのだが。
　まぁ、簡単に示すとこうなる。

…畑畑道家木木畑…
…畑畑道家木木畑…
…畑畑道畑木木畑…

…畑畑道畑畑畑畑…
…畑畑道畑蛙畑畑…
…畑畑道畑畑畑畑…

……書いてて嫌になってくるな。

そして佐倉家の門を出て徒歩十五秒、物井家の前に着く。インターホンに手を伸ばす……よりも先に物井が鍵を開けた。
「お母さ～ん！　よーくん来たよ～！」
『おかえりなさい……え？　洋一君が来たの？』
家の中から出てきた女性は、俺を見るとちょっと驚いたような顔をした。
「あら、洋一君？　……ずいぶん大きくなったわね～！　一瞬誰だか解らなかったわ～。」
「お久しぶりです。しばらくじいちゃんのところに厄介になるんで、挨拶しに来ました。」
「あら、そうなの？　それじゃあまたお隣さんね、何かあったらいつでもいらっしゃい？　ところで……」
そのまま雑談スタート。もちろん十分程度で解放されるわけがない……
「あら？　もうこんな時間じゃない。そしたら洋一君、またいつでもどうぞ。」
「ありがとうございます。」
「はい、気をつけてね？」
「はい、では失礼します。」
そして物井家を後にする。すると、一緒に出てきた物井が話しかけてくる。
「ねぇねぇ、よーくん。」
「ん？　なんだ？」
「わたしのこと呼ぶときは名前でいいよ？」

「あぁ！？　なんだいきなり？」
「だって～、なんかよーくんよそよそしいんだもん。」
「と言われてもな……」
「……だめなの？」

物井の目が若干潤みだした！

「わーったよ、名前で呼べってんだな？　天音。」
「わーい！　名前で呼んでくれた～！」
「……お前ってほんと単純なやつだな……」
まぁ、なんとなく心がどこかに収まったような気がするからいいか。
そして、じいちゃんの家の前までくる。
「さて、んじゃまたな。」
「うん、ところで学校はどうなってるの？」
「学校？　オヤジが転校手続は済ませてるって言ってたのは記憶にあるけど、いつからかは知らん。」
「う～ん……携帯持ってる？」
「少なくとも今時は必需品の部類に入ってると思うぞ？　で、携帯がどうした？」
「アドレス教えて？」
「あー、分かった。赤外線でいけるか？」
「大丈夫だよ。」
「じゃあ先にこっちから送るから。」
「おっけ～」
そして、赤外線ポートを向かい合わせ、プロフィールを送り、受け取る。　……物井天音、登録完了っと。
「そしたらいつから行くか分かったらメールするから。」
「うん、じゃあまたね！」
天音と別れて、家の門をくぐる。するとそこには、三十ぐらいだろうか？　見たことのない人がいた。

「……誰ですか。」
「あれっ？　君はもしかして宗司さんのお孫さんの洋一君かい？」
ちなみにじいちゃんの名前が宗司だから、おそらくこの人はじいちゃんの知り合いなのだろう。もっとも、俺の記憶にはこんな人がいた記憶はないが。
「……なんで俺の名前を知ってんですか？」
「もしかして僕のことは宗司さんからは何も聞いてないのかな？」
「はい？」
ちょうどその時、家の中からじいちゃんが出てきた。
「お～、おつかれさん。今日はどうじゃった？」
「特に問題はなかったです。あと、農協の人からこれを頂きました。」
その人はじいちゃんに野菜をいくつか手渡す。
「ほー！　これまたいい野菜じゃのう！」
「とびっきり出来がいいものだそうです。」
「ふむふむ、それじゃあばあさんに頼んで何か作ってもらうかのう。」
このままでは疑問が全く解消されないので、じいちゃんに聞いてみる。
「じいちゃん、この人誰？」
「お～、帰っておったか、洋一。そうか、お前にはまだ紹介しとらんかったな。この人は今うちに住み込みで畑仕事を手伝ってもらっちょる人じゃ。」
「はじめまして、松岸享です。今、宗司さんの所に厄介になっていますので、今後ともよろしくお願い致します。」
「……よろしくおねがいします。」
「ま、詳しい話は晩飯の時にでもしてやるからな。さて、洋一、荷物を持って移動じゃ。お前の部屋の用意ができたからついてきなさい。」
「じゃ、洋一くん。また後で。」

じいちゃんの後について、玄関に置き去りだった荷物を持って移動する。途中、廊下の曲がり角の辺りから夕食の支度をしているばあちゃんの姿がちらりと見えた。そのまま庭に面した縁側からも入れる廊下を通り、その突き当たり、この家で一番南側にある部屋にたどり着く。

「ほれ、この部屋を使いなさい。昔邦洋が使っておった部屋じゃから、一応机もあるからのう。」

邦洋、というのはオヤジの名前だ。昔オヤジが使ってた部屋か……おそらくこの部屋は、昔は二つの部屋に分かれていたのだろう。手前側はフローリング、奥側が畳敷きになっている。そして、そのうちのフローリングになっている部屋の方にいわゆる学習机と、空っぽの本棚があった。

「荷物は適宜しまうなり散らかすなりしておいて構わんぞ？」

「まぁ適当にやっとくよ。」

「さて、晩飯までまだ一時間はかかるから、好きにしてて構わんからの？」

そしてじいちゃんは食堂の方へ戻っていった。

「……ふぅ」

一息吐いて、改めて部屋を見渡してみる。ほとんど物が無いせいか、ずいぶん殺風景に感じる。それにやけにだだっ広い気もする。……まぁどう考えても前の家で俺に宛てがわれていた部屋よりは広いのだが。　……それにしてもいざ自由時間を持ってみると、案外持て余すもんだ、この部屋にはパソコンもテレビもない。ゲーム機は持ってきてはいるものの、最近ほとんどいじってないせいで、わざわざカバンの底から引っ張り出そうという気にもならない。

「なんもすることがねぇじゃんか……」

なので部屋の真ん中に大の字になって寝そべる。今気づいたが、この部屋の天井は板張りだった。よく見れば壁も壁紙ではない。ちょっと古めの温泉宿なんかで、緑色をしていてザラザラする壁があるじゃん？　あんな感じの材質だ。

そのままぼーっと天井を眺めていると、この一ヶ月に起こったことが次々に思い出される。　……あれからオヤジも、俺も変わった。いや、変わらざるを得なかった。　……オヤジは何を考えて俺をこっちに飛ばしたんだろうか。結局ちゃんと理由を聞くことはなかった。俺がここ一ヶ月ほとんどオヤジと口を聞いていない、ということが今更ながらはっきりと分かる。お互いに話し辛い状況ではあったが、それでも話をしなかったことが悔やまれる。だが、肝心のオヤジは、今日から出張で九州に行くと言っていた。しばらくは戻ってこれないだろう。なにしろ出張といいつつ、実態は単身赴任にかなり近いものがあるからだ。

　それからしばらく思索に耽っていると、廊下の向こうから俺を呼ぶ声が聞こえた。

「洋一〜！　晩飯じゃぞ〜！」

「今行くよ。」

短く答えて食堂へ向かう。そこには既にじいちゃんとばあちゃん、それにさっき庭で会った松岸さんがいた。

「ささ、早く席につきなさい。冷めないうちに食べてね。」

「……いただきます。」

メニューは、魚の干物を焼いたもの、ご飯、味噌汁、野菜の炒め物、それから漬物、その他に昨日の残り物と思しき料理が少々……なにか、ちゃんとした料理を食べるのは久しぶりな気がする。ここ一ヶ月はほとんどコンビニ飯かカップ麺、そうでなければファミレスで済ませていた気がする。

　箸を進めながら、じいちゃんと松岸さんは他愛のない会話を繰り広げている。その中身は、主に畑に関することのようだが。　……その二人の会話に一段落ついたのを見計らってじいちゃんに話しかける。

「じいちゃん、俺はいつから学校に行くんだ？」

「おお！　そういえば伝えてなかったかのう？　明日からじゃ。」

「明日ぁ！？」
「そりゃ一日中ここでゴロゴロしててもしかたないじゃろう？」
「まぁそうだけど……制服とかは？」
「もう届いちょるから、あとでばあさんに丈を合わせてもらとええ。」
「教科書とかはどうすんの？」
「学校で渡してくれると言っとったぞ。」
「そう、わかった。　……でさぁ、松岸さんってなんなの？」
「まぁ一言で言うなら住み込みの畑仕事要員兼家事手伝いというところかのう？」
「さっぱりわからん。」
「なら本人に聞けばいいじゃろう？」
ということで松岸さんと話を始める。
「僕？　まぁさっき宗司さんの言ったような感じだよ？」
やっぱりさっぱりわからん。

食事を終えて、自分の部屋に戻る。　……そうだ、天音にメールでも送っとくか。
『学校は明日からだってさ』
すぐに返信が着た。　……さすがに早すぎないか？
『おお～っ！　明日からだったんだ！　そしたら明日よーくんの家の前で待ってるから一緒に行こう！』
とりあえず返信。
『一緒に行く必要はないんじゃねぇの？』
やっぱりものすごい速さで返事が帰ってくる。
『え？　だって電車は同じのに乗るでしょ？　そもそもよーくん学校の場所分かってるの？』
……確かに。学校の場所は知らん。だが、
『そもそもお前と同じところかは知らんぞ？』
今度はちょっと間を置いて帰ってくる。

『そもそもこのあたりに高校は一つしかないよ？　他のところはちょっと遠すぎると思うし。それにわたしのクラスに転校生が来るってウワサが流れてたんだけど、それってたぶんよーくんのことでしょ？』
まぁこんな微妙な時期にやってくる転校生はそうはいないだろうから、たぶん俺のことだろう。
『分かった、じゃあお前のところで間違いなさそうだな。それじゃあ明日の朝な。』
次は速かった。内容も簡潔だったが。
『わかった♪　それじゃあまた明日っ！　おやすみ～♪』
さて、そろそろばあちゃんの洗い物も終わっただろうから、新しい制服の丈でも合わせてもらうか。
再び食堂に足を運ぶ。松岸さんとじいちゃんはいない。ばあちゃんは、たぶん俺のものと思われる見るからに新品の制服を出していた。
「あら？　洋一、ちょうどいいところに来たわねぇ。今から制服の丈を合わせるから、一通り着てもらえるかしら？」
そして新品の制服に袖を通す。袖は若干あまり、ズボンの裾も少し長い。というか学ランじゃねーか？
「これぐらいかしらねぇ？」
ばあちゃんが制服の長さが余った部分に印をつける。
「はい、そうしたらこっちに渡してもらえるかしら？　明日の朝までには仕上げておくからねぇ。」
案外あっさりと終わった。そして部屋に戻る。
　そのまま窓の外から聞こえる虫の声に耳を傾けながら、また思索に耽っていると、じいちゃんから風呂が空いた旨を伝えられた。

　もう今日は終わりだ。時計は深夜１２時を回っている。じいちゃんたちはとっくに寝てしまったので、おそらく今この家で起きているのは松岸さんと俺だけだろう。いや、もしかしたら松岸さんもも

う寝ているかもしれない。なにせ畑仕事でずいぶん疲れているみたいだったし。

「……そろそろ寝るか。」

そして部屋の電気を消し、俺は布団に潜り込んだ。

明日から、新しい生活が始まる……

第3話　（その出会いは必然か）

「洋一、朝ですよ～。」
ばあちゃんの声で目が覚める。
東側の窓から、木々の葉をくぐり抜けてきた朝日が俺の顔に降り注ぐ。時計を見ると、朝の六時半をさしていた。
　机の方を見ると、そこに真新しい制服がたたんで置いてある。どうやら昨日の夜のうちに丈を合わせたものを置きにきたついでに、俺を起こしていったらしい。そのまましばらくぼんやりとしていると、誰かが部屋の前にくる気配がした。
「おはよう、洋一。よく眠れたかのぅ？」
じいちゃんがやってきた。
「普通に眠れたよ。」
「そうかそうか、ならよかった。もうしばらくしたら朝飯が出来上がるから、それまでに着替えとくんじゃぞ？」
「わかった。」
そしてじいちゃんは去っていった。そして、俺は寝ぼけた頭を動かして、制服に袖を通す。
「ま、普通の制服だな。」
可もなく不可もなく、といったところか。前の学校はブレザーだったので、学ランというのもまた新鮮だ。
　新しいスクールバッグに筆箱、新しい上履きを入れ、いつでも出発できるよう準備を整えて食堂へ向かう。
「おはよう、洋一。」
「おはよう。」
「おはよう、洋一君。」
「おはようございます。」

今日の朝食はご飯、みそ汁、塩鮭を焼いたもの、漬物が少々……こんなに食べられる気がしない。
「では……いただきます。」
じいちゃんの音頭で朝食が始まる。
「そうじゃ、洋一。今日はワシもついていくからの。」
「学校に？」
「そうじゃ。お前さん、学校の場所を知らんじゃろ。」
「それなら天音に連れてってもらうことになってる。」
「おや？　そうじゃったのか。まぁそれでもついていくがの。」
「なんで？」
「一応お前さんの保護者じゃから、挨拶をしておかねばならんじゃろ？」
「……そうだね。」
「ほれ、早めに食べなさい。七時四十分の電車に乗らんと間に合わんぞ？」
ということだそうなので、ちょっとペースを上げて朝食を食べる。

そして準備を整え、じいちゃんの支度が終わるまで待つために縁側に腰かけてぼーっとしていると、天音が門をくぐって庭に入ってきた。
「おっはよ～、よーくん。」
「おはよ。」
「準備はできたの？」
「俺はな。じいちゃんはまだだ。」
「おじさんも行くの？」
「保護者だからついてくってさ。」
「そうなんだ～。……昨日はよく眠れた？」
「みんな同じことを聞くんだな。」
「あれ？　そうなの？」
そのまま天音とたわいのない話をしていると、じいちゃんが支度を

終えてやってきた。
「待たせてすまんのう、おや？　天音ちゃん、おはよう。」
「おはようございます。」
「学校で洋一を頼むぞぃ。」
「わかりました～！」
「さて、それじゃあ行くとするかの。……亨さ～ん、ワシは昼までには戻るからそれまでよろしくたのむぞ～い。」
『わかりました～！』
裏の倉庫のほうから返事が飛んできた。　……あの人も忙しいな。

そして、家を出た俺たちは、家を出て畑の中を歩いて行く。
「洋一、道は覚えられそうかの？」
「たぶん大丈夫。」
「もし覚えられなくってもわたしが教えてあげるから大丈夫！」
「それに頼ることがないようにちゃんと覚えるから大丈夫だ。」
「うう～……頼ってくれていいんだよ～？」
「お前を俺の都合で振り回すのは気が引けるからな。」
「まぁ、迷子になったら家に電話をするとええ。場所が分かればワシか亨さんが迎えに行くからのう。」
「それこそ絶対に避けたいよ……」
「ほれ、そこの小道を曲がるんじゃぞ。」
ちょっとした森の中を通る小道を抜けると、目の前に踏切と線路が現れた。
「帰るときはこの踏切を目印にすると迷わんで済むぞ？」
線路の両側を見渡してみるが、この近くにはそんなに踏切はないようだ。一応踏切の名前を覚えておく。
「この線路沿いに左に行くと駅につくんだよ～。」
天音がなぜかちょっと得意気に言う。だが、昨日も通った道をすぐに忘れるほど俺はバカではないつもりだ。
そのまま歩くこと十五分、昨日降り立った駅に着く。そこにはこ

れから通うことになる高校の生徒が、サラリーマンやＯＬに混じって割と多くいる。
『おっはよ～、天音～……ってその子だれ？』
おそらく天音の友人だろうか、天音と同じ制服に身を包んだ女子生徒がいる。
「へっへ～、これがウワサの転校生なのだ～！」
「へ～、そうなんだ……」
その女子生徒は値踏みをするように俺を見る。
「ふ～ん、天音、名前は何て言うの？」
「佐倉洋一くんだよ。」
「佐倉？　あの佐倉さん？」
「ほら、あそこにおじさんがいるでしょ？」
天音はこちらに戻ってくるじいちゃんの方を指さす。
「へー……ほんとだ！」
「えへへ～、よーくんはおじさんのお孫さんなんだよ～。」
「あとであたしにも紹介してよ？」
「うん、わかった！」
なにやら話の元になっている人をおいてけぼりで話が進んでいる……
「洋一、定期券は今日の昼のうちに買っておくから、今日は普通に切符を買っといてくれぃ。」
「わかった。」
「それから昼飯代を渡しておくから、これで何か買って食べるとええ。」
じいちゃんは『野口英世』を差し出してきた。
「ありがとう。で、電車はまだ来ない？」
「もうしばらくしたら来るぞ。四十三分発じゃからな。」
時計を見ると、今は七時三十九分。……あと四分は来ないのか……
山手線なら二本来ててもおかしくないぞ？
　そして、ほぼ定刻通りにやってきた電車は、四両編成と短いせいか学生やサラリーマン達で混み合っている。

「うっひゃ～……やっぱり混んでるなぁ～……」
天音がボソっとつぶやく。そして、それに無条件で反応してしまう俺。
「……どこが混んでんだ？」
混み合っている、とは言っても人と人の間にちゃんと空間はある。
「え？　混んでるよ？」
天音が不思議そうに聞き返してくる。
「……俺はこんなのは混んでいるとは認めない。」
混んでいるというのは、少なくとも人が押し合いへし合いしながらやっとのことで収まるといったイメージがある。もっとも、どこぞの最凶線みたいに混雑が過ぎて骨折者が出る、とか言う都市伝説レベルの混雑は願い下げだが。
　列車の中に乗り込み、ドアの前に立って天音と話をしていると、さっきから周囲の視線を集めているような気がしてしょうがない。
「なぁ、天音……さっきからいろんな人がこっち見てないか？」
「う～ん……そうかもね……」
「俺が見慣れない人間だからか？」
「高校生はそうかもね～、大人の人はたぶんおじさん見てるんだと思うけど……」
じいちゃんは周囲の視線はどこ吹く風、といった風にさっき駅で出会ったらしい顔見知りの人と話している。
「どうも視線にさらされるのは好きになれないな……」
そのとき、先ほど駅で天音と話していたのとは別の女子生徒が天音に話しかけてきた。
「おはよう……天音ちゃん。」
「うん？　……千尋ちゃん！　おはよー！」
ずいぶんと気が弱そうな女の子だ。身長は天音より若干低め、髪は肩につくかつかないかぐらいの長さ。スクールバッグを律儀に両手で持ち、ちょっと縮こまっている様はさながらに小動物を連想させる。そして、そのどこか気弱な目で俺を見ながら、控えめに天音に

質問を投げかける。
「その人、だれ？」
「ウワサの転校生だよ。」
「そうなんだ……」
そしてその子は、二・三度俺を見ると、天音にまたあとで、と告げて反対側のドアの前に移動した。
「友達か？」
「うん、わたしの隣の席の子だよ。」
「そうなのか……ところでさぁ、まだ次の駅に着かないのか？」
「だってまだ駅を出てから三分ぐらいしか経ってないよ？」
「……もう三分も経ってるじゃん。」
「そんなに不思議なことなの？」
「……一応聞いておくが、さっきの駅から俺たちが降りる駅まではいくつ駅がある？」
「降りる駅は次の次だよ？」
ということは二つ先の駅か……
「で、何分かかるんだ？」
「十分ぐらい？」
……一駅につき五分！？
「いくらなんでも遠すぎだろ！」
「なんで？　そんなに遠くないでしょ？」
「俺は一駅一分の世界がデフォルトなんだよ！」
「そんなに短いの？」
「……なんかアタマ痛くなってきたよ。」
「でもたった十分だし、すぐに慣れると思うよ？」
「電車が一時間に一本っていうのには慣れたくないな。」
「そんなに不思議なことかなぁ……？」
そうこうしている間に一つ目の駅に停まり、俺たちが降りる駅は次の駅になっていた。

……そう、さっきから何か違和感があると思ったら、車内広告があまり無いのだ。あるのは鉄道会社の広告と、大学の広告だろうか？　東京で見たような週刊誌の広告の類はほとんど見当たらない。
窓の外に目をやると、先ほどまで広がっていた田園風景の代わりに、住宅地の風景が広がっていた。もっとも家々の間にちょこちょこ畑があるのはご愛嬌。

そして、電車は目的の駅に滑り込む。この駅は幹線が通っているということで、今までの駅に比べてはるかに大きく、何より駅舎があるというそれだけで、ちょっとは都会に出てきたような気にさせてくれる。まぁ気にさせるだけで実際は都会でも何でもないのだが。ちなみにさっき車窓からちらっと見たのだが、やはりビルらしきものはほとんど見当たらない。代わりにやたらとだだっ広いバスターミナルはあったが。
「とうちゃーく！」
「洋一、さすがにこの駅を間違えることはないと思うが、間違えるんじゃないぞ？」
「これを間違えるっていうのは恐ろしく難しいと思うよ。」
ホームには学生が溢れかえっている。今俺が着ている服と同じ制服なので、これから通うところの生徒なのだろう。改札をでても生徒の列は途切れることなく、みんな同じ出口に向かってぞろぞろと歩いていく。
「これなら迷子になる心配はなさそうだな。」
「そうだね～。」
そしてその列について行く。駅を出た辺りから、生徒の歩く速さによって列にばらつきが生じる。
「学校へはこの道をまっすぐ行くだけでつくんだよ～。」
「先に言っておくが、迷子になる要素はこの道にはないからな？」
「もしかしたら途中で二股に分かれてるかもしれないよ？」
「その程度じゃ俺は迷子にはならない。」

「むむー、じゃあ途中が迷路になってたら？」
「そんなステキ通学路は願い下げだな！？」
「畑のど真ん中に一人ぼっちにされたら？」
「建物に向かって歩く……か？」
「川の中洲に置き去りにされたら？」
「通学路でそれは絶対にない！」
なんか話が思いっきり逸れているので、これ以上この話題について話すのはやめだ。
「そういえば一学年は何クラスぐらいあるんだ？」
「え～っとね、５クラスかな。」
「案外多いんだな。」
「それはこのあたりの高校生はみんなそこに行くんだもん。」
「いや、何つーかもっと少ないもんだと思ってた。」
「そうなの？　でも１クラスは３５人ぐらいだよ。」
「そうすると５クラスで１７５人か……４クラスにすると１クラスあたり４４人ぐらいか。微妙だな。」
「１クラス４４人はちょっと多いかもね～。わたしなんかクラスの人の名前全部覚えられないかも。」
「４４人ぐらい覚えられるんじゃねえの？」
……俺が前にいた学校は１クラス４０人強だったが、全部覚えている自信はないな……

そして、話しながら歩いていると、前方に学校らしき建物が見えてきた。
「ほら、あれがこれからよーくんも通う学校だよ。」
「わりときれいだな。もっとボロいのを想像してたんだが。」
「五年前に建て替えたんだって。あんまりにもボロボロだったから。」
「……そりゃきれいなわけだ。」
個人的にはその建て替え前の校舎にも興味があるんだが……

そして校門の前につく。門の向こうには、右に見えるグラウンドを回り込むように緩やかな坂道があり、坂の奥、校門から見て右斜め前の方向に、グラウンドに河原と土手のような感じの高低差をつけて校舎、その奥に体育館がある。どうやら学校の施設の全てが周囲と比べて一段高い場所にあるようだ。グラウンドは道路と同じ高さにある。そして、そのグラウンドの周りの斜面は一部を除いて芝生に覆われていて、芝生に覆われていない部分はコンクリート剥き出しで、かなり段差のある階段のようになっている。　……もしかして観客席のつもりなのか？

そして門をくぐって坂道を登って行く。坂を登りきると、左側に校舎とは別の建物がある。窓からピアノが見えるので、きっとあの場所が音楽室なのだろう。吹奏楽部と思われる生徒達がラッパなりなんなりもって朝練をしているようだし。

校舎の中に入ると、唐突にじいちゃんが口を開いた。

「天音ちゃん、職員室はどこにあるんじゃ？」

「あ、おじさんもしかして校舎が新しくなってから一度も来てないですか？」

「うむ……ずいぶん変わったのう……」

もしかしてさっきからじいちゃんが一言も喋らなかった理由はびっくりしていたからなのか？

「職員室は二階なんです。」

「すまんがちょいと案内してもらえるかの？」

「おまかせあれです。」

天音は靴を履き替えると、俺とじいちゃんに先立って歩き出した。

階段を上がった二階の、たしか体育館のある方向の廊下の途中に職員室はあった。

「おお、ここか。どうもありがとう。」

「どういたしまして～。それじゃあよーくん、またあとでね！」

そして天音はさっき登ってきた階段へ戻って行った。どうやら教室は二階より上にあるらしい。

「それじゃあ洋一、はいるぞ？」
「わかった。」
じいちゃんが職員室のドアを開ける。すると、ドアの一番近くにいた先生が応対するためにこちらにやってきた。
「どうしましたか？」
「今日からここに転入することになっとる佐倉じゃが……」
「あー、転入生！　少々お待ちください……八街センセー！」
その先生は、職員室の中に向かって誰かを呼んだ。
『なんだ～？』
「転入生です！」
『分かった、今そっちに行く。』
そして、若い男の先生がやってきた。
「転入生はきみか。きみの担任になる八街哲也（やちまた　てつや）だ。よろしく。」
八街先生は手を差し出して握手を求めてきた。こちらもそれに応じて握手をする。それがすむと、八街先生はじいちゃんに話しかけた。
「初めまして、佐倉さん。お孫さんの担任を引き受けさせていただきます八街と申します。」
「八街先生、じゃな？　洋一をよろしく頼みます。」
「はい、お任せください。ところでどういたします？　何か話していかれますか？」
「いや、ワシは一応仕事もあるのでもう帰りますわ。」
「分かりました。お見送り致しましょうか？」
「いや、結構ですじゃ。お気持ちだけ受け取っておきます。」
「はい、ではお気をつけてお帰りください。」
「それじゃあ洋一、がんばっての～。」
そしてじいちゃんは職員室を出て行った。
「……さて佐倉、一応ホームルームの時間までは職員室待機でいいか？」
「まぁ構いません……」
「それと、お前から俺に話しておくことはなんかあるか？」

「……いえ、特には。」
「分かった。なら時間になるまで雑談でもするか。　……っとその前に、」
八街先生は職員室の壁についている受話器をとると、それに向かって声を出す。
『一年C組の委員長か副委員長のどちらか、職員室まで来るように』
あれは校内放送用の器具だったようだ。そして、それからすぐに生徒が職員室に入ってきた。
『失礼します。』
入ってきたのは男子生徒と女子生徒の二人組、おそらく女子生徒の方が委員長なのだろう。全身からそんな感じの雰囲気を漂わせている。背の高さは隣の男子生徒と比べると低いが、まぁ平均は越えているに違いない。そして長くて艶やかな黒髪を背中の中程まで伸ばしている。顔も抜群にかわいい。絶対にモテるタイプだ。対する男子生徒の方は、まぁいわゆるモヤシというのか？　全身から文化系オーラを漂わせている。ただ、その纏う雰囲気は、半端ではなく頭が良さそうだと思わせるには十分だ。それによく見れば細くても肩は割とガッチリしているようにも見える。　……あれか、きっと勉強もできて運動もそれなりにできるとかいうパターンか。
「なんだ？　お前ら両方来なくてもよかったんだぞ？」
「そこの階段で出くわしたので、そのまま来ました。」
「僕は旭さんに任せようとしたんですけど、『いいから来なさい』って言われてそのまま連れてこられました。」
「……まぁいい。で、用事はだな、転校生の席をまだ用意してなかったから数学教室の机と椅子をパクって適当に席を決めといてくれ。」
「分かりました。」
「適当に決めちゃっていいんですね？」
「おうよ、その辺の裁量は任せる。じゃあ行けい！」
『失礼しました』

そしてその二人組は職員室を出ていった。
「あの二人がウチの委員長と副委員長だから、何か困ったことがあったら適宜頼るといい。委員長は女の方で、名前は旭、副委員長は男の方で、名前は小金井だ。」
そのまま話を続けていると、始業五分前を告げるチャイムが鳴った。
「さて、じゃあ行くぞ。っと、教科書はこれな。」
本の束を手渡される。
「よし、荷物は持ったな？　……ってお前まだ靴のままか。なら後で履き替えろ、下駄箱の場所は割り当てておくからな。」
そして、八街先生の後について職員室を出る。階段を昇り三階につくと、廊下の中央付近にある教室の前にくる。
「よし、じゃあ俺が合図するまでここで待っててくれ。」
そう告げて八街先生は教室の中へ入っていった。しばらく中で八街先生が話している話の中身に耳を傾けていると、中から声がかかった。
『お～い、入ってきていいぞ～。』
教室のドアを開けると、教室中の生徒がこちらを見る。まぁ当然の反応だよな。そして教室中の視線を集めながら先生の横へ歩いていく。
「え～、今日からこのクラスの一員になる佐倉洋一くんだ。……佐倉、自己紹介。」
「佐倉洋一です。よろしくお願いします。」
「それで終わりか？　まぁお前がそれでいいなら別に一向に構わんが……　さて、旭、小金井。佐倉の席はどこになった？」
「そこです。」
指し示された場所は、一番後ろの列、窓側から数えて二番目の場所だった。　……おい、隣にあいつがいるぞ……
「そこか。佐倉、もう席に行っていいぞ？」
ということなのでさっさと教壇を離れてその席に向かう。そして、荷物を置くと椅子に腰を下ろした。すると、となりのあいつが話し

かけてくる。
「よーくん、いらっしゃ～い！」
「なんでお前が隣にいるんだ？」
「綾音ちゃんに頼んでそこにしてもらったんだもん。」
「そいつは誰だ？」
「私のことだけど？」
俺の前に座っていた女子生徒がこちらを振り返っている。って委員長か？
「あんたさっき職員室にきてたよな？」
「そうだけど？」
「旭さんだっけ。」
「先生に聞いたの？」
「ああ、そう。」
「そう……私は旭綾音（あさひあやね）、このクラスのクラス委員長をしてるわ。それから、私の隣、窓際で寝てるのが副委員長の小金井くん。ちょっと待ってて、今起こすから。」
そういって副委員長の肩を揺する。
「ん？　何？　先生の話ならとっくに終わってるよ？」
寝ている、といっても目を閉じていた程度だったのか、副委員長は寝起きとは思えないはっきりした返答を返す。
「転校生の佐倉君に挨拶した方がいいわよ。」
「あー、そういうことね。」
そして、副委員長は俺の方を向き、自己紹介を始める。
「はじめまして？　僕は副委員長の小金井彰（こがねいあきら）。ヨロシク。」
すると、委員長の、副委員長とは反対側の隣の生徒が突然自己紹介を始める。
「オレは榎戸俊一（えのきどしゅんいち）、よろしくな。」
俺がちょっと言葉を返すのをためらっていると、副委員長がフォローに入ってくる。
「榎戸、導入もなしにいきなり自己紹介してどうすんだよ。」

「いや～、この空気ならいける！　って思ったんだけどな～。」
「せめてその前に何か一言言うべきだと思うけどな。」
「まぁそこはノリで、というわけでよろしくな、佐倉。」
「……おう。」
「なんだよー、もっと元気よく『応！』って返事をしてくれよ～。」
再び副委員長が助け船を出す。
「お前のいつものノリを強要するなよ。そもそも佐倉がこのクラスに来てから十分も経ってないぞ？」
「そんなの気にすんな！　な、佐倉もそう思うだろ？」
正直いってこいつの馴れ馴れしさはちょっとウザいな……
「……榎戸君、もう止めなさい。」
「委員長！　新しくきたクラスメイトとの親睦を深めて何が悪いんですか！」
「その態度が悪いのよ！」
「いつものノリで何が悪いんだ！？」
「っ！　今日という今日は一発殴ってやるわ！」
「おーい、旭さーん。もうちょっと落ち着けよー。」
副委員長が喧嘩腰になりつつある二人を止めに入るも、残念ながらやる気というものが微塵も感じられない。というか委員長が地味に怖いな……
「小金井！　止めてくれるな！　こいつは男の戦いなんだ！」
「相手が女じゃ話にならんよ。それに旭さんは地味に強いよ？」
「小金井……お前旭と喧嘩したことあるのか！？」
「いや、一方的に殴られただけ。」
「委員長！　委員長ともあろう人が無抵抗の人間を殴ったんですか！？」
「あ……あれは小金井くんが悪いのよ！」
「……どっちかというとお互いさまだと思うけどね。」
「なになに～、なにがあったのさお二人さん？」
「榎戸君、その答えは地獄で探していらっしゃい！」

「ぎゃー、委員長が怒ったー。」
榎戸、とか言うやつの顔は全力で笑っている。しかし、委員長の顔はどう見ても本気で怒っている。
「……あ、綾音ちゃん……先生、来てるよ……」
今度は俺の、天音とは反対側に座っていた隣の生徒が委員長を止めにはいる。こっちは本気で止めようとしているらしい。
「止めないで！　千尋！　こういうやつを放っておくと図に乗って大変なことになるのよ！」
「だから先生が来てるよぉ……」
委員長の剣幕に圧されたのか、半分泣きそうな顔で場を収めようとしている。
『お～い、小金井。そこの二人を何とかしろ～。』
とうとう先生から注意が飛んできた。それもなぜか言い争っている二人ではなく副委員長の方に。
「無理です。」
即答かよ……
『そこを何とかしろ。お前なら旭も榎戸も抑えられるだろ。』
副委員長はあからさまに嫌そうな顔をしつつも、口喧嘩に終止符を打つべく動き出した。
「榎戸、もう止めろ。宿題写させないし、勉強も教えてやらないぞ？」
「そっ……それだけは勘弁してくれ！」
「じゃあ止めろ。旭さんもそこまでにしてくれないとあの話をみんなの前で話すよ？」
「あ……あの話ってどれ！？」
どれって……そんなにいろいろあるのか！？　……とりあえず副委員長はこの二人の弱みをずいぶん握っているみたいだな……敵に回さないようにした方がいいかもしれない……
『とりあえず二人とも席に着け～』
「スンマセン！」

「すみません。」
二人とも先生に謝って椅子に座る。
「なぁ天音、何の授業が始まるんだ？」
「国語だよ。」
俺の声を聞きつけたのか、先生が確認をとるように聞いてくる。
『転入生、教科書はもらったか？』
「あ、はい、もらいました。」
『わかった。ノートは旭にでも見せてもらえ。　……じゃあ始めるか。３６ページを開けてくれ。そして榎戸、朝っぱらから授業を送らせたからにはどうなるか解ってるよな？』
榎戸は笑顔で堂々と言い放つ。
「センセー、何ページでしたっけ？」
『……３６ページ、とっとと音読しろ。』

第４話　（休み時間と無駄話）

転校初日、一時間目の授業が終わった。
「いや～、参ったね～。いきなり当てられたからビビったぜ～。」
「散々騒いだあなたが悪いのよ。」
「んなこと言ったって旭がオトナの対応してればよかったんじゃねぇの？」
「……本当に一発殴らせてもらえるかしら？　大丈夫、中途半端にはやらないわ。」
「いや、マジで勘弁してくれ……彰、ヘルプ！」
「……どう考えても今のはお前が悪い。というわけで助け舟は出せない。」
「……ゴメンナサイ、旭さま。」
「最後の言い方もちょっと気にくわないけど、いいわ。今回の件は水に流しましょう。」
「あ～、なんかつまんねぇな～。」
「そんなに旭さんと喧嘩したいのか？　別に止めないぞ？」
「いや、そういうわけじゃないから。なんかこう、旭が疲れてるっぽくてさ。」
「それをあなたが煽ってるっていうことに早く気づいてほしいわ。」
「なんだよ～、放っといた方がいいのかよ。」
「その方が一千倍気が楽ね。」
「はぁぁ～……」
榎戸はかなりテンションが下がったようだ。きっといつもこれぐらい静かなら（もっともそれでも地味にうるさいが）みんなの評価も変わるだろうに。
「さて、じゃあさっきの騒動でなんか自己紹介が流れちゃったから、

改めて自己紹介やろうか。」
副委員長が場を仕切る。
「じゃあ旭さんから。」
「私から？　別に構わないけど……　それじゃあ改めて、佐倉君、私は旭綾音、このクラスのクラス委員長をしてるわ。もっとも、だからといって『委員長』とは呼んでほしくないから、あなたの判断でどう呼ぶか決めてちょうだい。」
口ではそう言うものの、『委員長』とは呼ばせない雰囲気を纏う委員長。
「よろしく、旭。」
旭は満足そうに会釈を返すと、副委員長に自己紹介のバトンを渡す。
「んじゃ改めて、僕は小金井彰、旭さんと同じくクラスの副委員長をやってるから。僕を呼ぶときは普通に『小金井』で構わないよ。」
「よろしく。」
続いて榎戸の番。
「オレは榎戸俊一、まぁ特に何かやってるわけじゃないけどヨロシク。」
「ああ、よろしく。」
ここまできて、小金井が天音に聞く。
「佐倉は物井さんのことは知ってるみたいだから、物井さんは自己紹介しなくても大丈夫かな？」
「うん、大丈夫。」
その言葉を受けて、小金井はもう一人この場にいる生徒に話をふる。
「じゃあ小見川さん、やる？」
「え？　わたし？」
「他に小見川さんはいないと思うけど？」
小見川と呼ばれた女子生徒は、ちょっとオドオドしながら自己紹介を始める。
「こ……小見川千尋です……よろしくお願いします……」
「よろしく。」

小見川がそのまま黙ってしまったのを見て、小金井は自己紹介を終えたと判断したのだろうか、別の話題に持っていく。
「一応先に言っとくけど、放課後に校舎案内をするつもりなんだけど、来るよね？」
俺に拒否権はなさそうだな……
「頼む。」
「了解、そしたら帰りのホームルームが終わったら声かけるから。」
「わかった。」
「ついでに僕らについてなんか聞きたいことはある？」
……今は特にないな。
「特にない。」
「そう？　趣味は何か、とか好きな芸能人は誰か、とかでもいいんだよ？」
「気が向いたら聞くよ。」
「わかった、それじゃテキトーに喋りますか～。」
その直後、榎戸がいきなり喋り出した。
「そうだ！　佐倉、旭んちはオヤジさんが銀行のお偉いさんだから、こいつ実はお嬢様なんだぜ！」
今までの話となんの脈絡も無いことだな。
「ちょっと！　いきなり何言ってるの！」
驚いているような怒っているような、そんな語調で旭が榎戸をたしなめる。
「そうなのか。でもなんでいきなりそれを？」
「いや～、だって旭さ、『殴ってやる！』とかお嬢様とは思えないこと言うじゃん？」
「……だから？」
「脳内補正をかけるために知っておいてくれってことだよ。」
「……どう補正しろと？」
「あんなことやこんなことを言っててちょっとウザく感じても、下手に逆らうとヤバいってことだ！」

旭がそこで口を挟む。
「それで『ヤバいこと』になるのは榎戸君だけよ。」
「ぬおっ！？　オレは敵に見られてる！？」
旭は榎戸を無視すると、俺に念を押すように話を続ける。
「とりあえず、だからといって私を特別扱いしたらそれなりの対応をとるから、覚えておいて。」
目が本気だ……
「……分かった、覚えとく。」
榎戸はちょっと拗ねたような声を上げる。
「なんだよ～、別に隠すことかよ～。」
「隠すことなの。」
「べつにいいじゃね～かよ～。」
「……どうでもいいことじゃないのよ！！」
旭が本気で怒った声を上げたことで、場が一瞬静まりかえる。
「ま、そういうことらしいから。覚えておいてあげてね。」
小金井が沈黙を破る。
「俊一、いつも言ってることだけど、もう少しでいいから気配を察しろ。じゃないと本当に喧嘩が起きるから。」
「オレは悪いこと言ったつもりはないんだけどな……」
「お前にとってはそうでも、その言葉を受け取る側はそうは思ってないんだよ。」
「ちぇ～っ、でもお前だって隠してないか？」
「別に言う必要は何もないだろ？」
「じゃあ言ってもいいのか？」
「別に一向に構わないけど。」
「まぁいいや、聞きたかったら佐倉が自分で聞けばいいんだし。な？」
……何を隠してるんだ？
「小金井、何を言わないんだ？」
「あー、僕の父さんが医者だってことだよ。」

「それだけなのか？」
「そう、それだけ。」
「……わざわざ言わないで済ませようとするほどのことか？」
「まぁ色々とあるんだよ。たぶん分からないとは思うし、知らない方がいいと思う。」
「そうか、そうならそれでいいよ。わざわざ人のことに首を突っ込む趣味はないしな。」
「ほ～　……俊一、佐倉を見習った方がいいんじゃない？」
榎戸は会話の流れをまったく読まずに一言言い放つ。
「我が人生に一片の悔いなし！」
……微妙に話がつながるだと？
「死にたかったら旭さんに喧嘩を売るといいよ。三秒で送ってくれるさ。」
「天国と地獄のどっちだ？」
「それはぜひ死んで確かめてくれ。」
「いやだ～！　オレはまだ死にたくな～い！」
旭が口を開く。
「お望みとあらば今すぐにでも手を下すけど？」
「いや、マジで勘弁してください……」
……なんかさっきも似たような台詞を聞いたなぁ……
「ならば余計な口は謹みなさい。」
「こえ～……そう思うよな？　小見川？」
「ふぇ！？」
何かを期待する顔で小見川を見る榎戸と、『何て言えばいいかは解ってるわよね？』的な顔で見る旭の圧力をうけ、また泣きそうな顔で答える小見川。こういうのを『義理と人情の板ばさみ』っていうのか？　……いや、なんか違う……よな？
「……え……榎戸君……綾音ちゃんを怒らせちゃだめだよ……」
「小見川あぁぁぁぁ！！」
その場で頭を抱えて、絶望のあまり床に崩れ落ちる榎戸。そこに旭

が追い討ちをかける。
「ということだから、榎戸君。早めに理解してくれるととっても助かるわ。」
その時、さっきから沈黙を貫いてきた天音がやっと話し出す。
「綾音ちゃん、さすがに榎戸君もかわいそうだし、もう終わりにしてあげない？」
旭はやや不満そうな顔をしつつも、その提案を受け入れる。
「……榎戸君、天音の心の広さに感謝しなさいよ。」
どうやら決着がついたようだ。
「あー、彰、オレちょっとトイレ行ってくる。」
「いちいち報告しなくてもいいんだけどね。」
教室を出て行く榎戸。
「千尋、天音、ちょっと手伝いでついてきて。」
「あ、うん。」
「うん、わかった。」
そしてその場に俺と小金井が残された。
「……なんかずいぶん見苦しかったけど、あれがいつもプラスαぐらいだから、早めに慣れちゃった方がいいかもしれない。」
さらりと慣れを要求する小金井。
「できれば慣れたくないな……」
「そう思っててもいつの間にか慣れちゃってるのが人間だよ。」
「ところで天音たちはどこに行ったんだ？」
「あー、あれは職員室に配布物を取りに行ったんだよ。」
「配布物？」
「そう、今日の授業で使うプリントとかね。量が多いときは先に持ってかせて配らせるんだよ。」
「そりゃ大変だな。」
「まぁそういう仕事をこなすのが委員長の仕事だから。　……まぁ僕だったら他の誰かを派遣するんだけど、旭さんはそのへん真面目だからな～。」

「真面目っつーか、頑固？」
「……まぁ当たらずとも遠からずってところかな。」
小金井は、まぁそこまで頭が固いわけではないから、と付け足す。
「ところで、ちょっといいか？」
「ん？　なに？」
「……さっき旭がかなり怒ってただろ。なにかあるのか？」
「あー、あれか……悪いけどその件に関しては僕の口からは言えない。そのうち旭さん自身が話してくれるかもしれないから、そっちに期待した方がいいよ。」
「そうか……わかった。」
ものわかりが良くてよろしい、と頷く小金井。
「それと今度は僕から質問。佐倉、僕らになにか大事な事を隠してないかい？」
「……そんなことは、ない。」
「そう？　思い過ごしならそれでいいんだけど。なんとなく思ったことだから気にしないでもらえると助かるな。」
小金井はケロッとした顔で話を続ける。　……それにしてもずいぶん勘が鋭いな。ちょっと警戒した方がいいのかもしれない。
　その後すぐに、榎戸が戻ってくる。それから少したって、二時間目の始まりを告げるチャイムが鳴るころ、旭、小見川、天音の三人が結構な量のプリントを持って戻ってきた。その直後、次の時間を担当する先生が教室に入ってくる。

　二時間目、科目は世界史だそうだ。

第5話　（昼休みの攻防）

「うっしゃ～！　メシだ～！」
榎戸が伸びをしながら叫ぶ。
四時間目、八街先生の数学の授業が終わった。
「さて、佐倉は昼はどうするんだい？」
小金井が問いかけてくる。
「俺は買い弁だ。」
「そうか～、そしたらまずは食料が調達できる場所を教えなきゃだね。」
……『食料』に『調達』って、軍隊かよ……
そして小金井は女子三人にも声をかける。
「旭さん、物井さん、小見川さん。みんなはどうなってるんだい？」
「私はお弁当よ。」
「わたしも買い弁！」
「わ、わたしはお弁当だから……」
それを聞いて小金井は榎戸にも聞く。
「俊一は？」
「オレはいつものように買い弁だぜ。」
「分かった。」
そう小金井が言った後、旭が小金井に話しかける。
「じゃあいつものところで待ち合わせかしら？」
「そうだね。食べ物を買ったらすぐ行くから、先に行ってて。」
「分かったわ。それと飲み物を頼めるかしら？」
「いつものやつ？」
「そう、それ。」

「了解、買っとくよ。」
「ありがとう。じゃあ千尋、行きましょう。」
「あ、うん。行こう。」
そして、旭と小見川は弁当袋とおぼしき袋を持って教室を出て行った。
「さて、じゃあ僕らも行こうか。」
小金井について教室を出る。
廊下を進んで、階段を下る。二階に着くと、職員室のある廊下の、職員室とは反対の方向に少し行ったところに、多くの生徒の話し声が聞こえてくる場所があった。
「ここが食堂。食べられるものはここで買えるから、それと放課後も『一応』開いてる。もっともその時は何か買えるわけじゃないんだけどね。」
小金井に促されるままに中に入る。そこには、まぁ一般的なイメージどおりの学生食堂がある。窓の向こうにはグラウンドが見えている。そして、意外と昼を買いにきている生徒が多く、ちょっと混雑気味だ。
「じゃあ僕は飲み物買ってくるから、俊一と物井さんと一緒に何か買ってきて。」
そう言って小金井は榎戸に、外で待っていると伝えて、食堂を出て行った。
「さーて佐倉、なんにする？」
榎戸はメニューに素早く目を走らせている。
「決めた！　オレはカツカレー！」
そう叫んで榎戸はカウンターの方へ行く。
「よーくん、どうする？」
天音は榎戸のように一人で突撃する気はないらしい。
「どうすっかな。正直あんまり腹は減ってないんだよ。」
「う～ん……それならあれなんかどうかな？」
天音が指さす先にはコンビニでも見かけるようなパンが並んでいる。

「そうだな、あれでいいや。天音はどうすんだ？」
「わたしは～、……どうしよう？　わたしもそんなにお腹はすいてないんだよね……」
しばし悩む天音だったが、すぐに決まったようだ。
「オムレツにしよ～♪」
腹は減ってないんだよな……！？
そして天音はオムレツを注文するために、食券を買いにいった。そして、俺がパンを買おうと陳列棚に近づいた時、カツカレーを買い終えた榎戸がやってきた。
「佐倉～、パン買ったか？」
「まだだ。」
「そうか、んじゃオレが選んでやろうか？」
「いや、大丈夫だ。……ところで会計はどこでやるんだ？」
「ん？　ああ、レジな。あそこだ。」
榎戸は陳列棚の端を指し示す。そこにはいかにも購買部のおばちゃん、といった感じの人が立っていて、パンやおにぎりを持った生徒からお金を受け取っている。
「サンキュ。んじゃちょっと買ってくるから、先に小金井のところで待っててくれ。」
「あいよ～、それじゃ先に行ってるぜ。」
そして榎戸は食堂を出て行く。さて、俺もパンを買うか。

パンを買い終え、天音と合流して食堂の廊下に出ると、既に買い物を終えた小金井と榎戸が待っていた。
「よし、じゃあ行こうか。旭さんたちも待ってると思うし。」
そして、さらに階段を下り、玄関を通って校庭に出る。校庭にはコンクリ造りの観客席のようなところや斜面の芝生の上に生徒がちらほらいて、弁当を食べたり話をしたりしている。そしてグラウンドでは、生徒達がサッカーをしている。
小金井について歩いて行くと、観客席のようなところと芝生の境

目辺りに弁当を広げている旭と小見川の姿が見えた。
「はい、旭さん、これだよね？」
小金井は旭にお茶のペットボトルを渡す。
「ありがとう。」
そして、旭の隣に小金井は腰を下ろす。小見川の隣に天音、そして小金井の、旭とは反対側に榎戸が座る。
「よーくん、こっち来たら？」
天音が横を示す。
「……んじゃちょっと失礼。」
そして天音の隣に腰を下ろす。
「さて、いただきます。」
そしてみんなそれぞれの昼食を食べ始める。
「てかさぁ、佐倉、お前どっから来てんだ？」
俺が答えるより先に天音が答える。
「わたしの家の隣からだよ～」
「なぬ！？　物井、お前の隣だと！？」
「うん。」
「本当か？　佐倉？」
「そうだ。」
「なーるほど、それで物井が転校生の話を知ってたんだ。」
そこで旭が口をはさむ。
「一応言っておくけど、転校生の話を知らなかった人はあんまりいないわよ？」
「げっ……マジ？」
「そうよ。どっから漏れ出たのかは知らないけれど。」
「彰～、マジか～？」
「何？　私の話は信じられないの？」
「違う違う！　そんな目でオレを見るなぁ！　ほら、実は彰も知らなかった～とかあるかもしれないじゃん！」
「私は小金井くんから聞いたんだけど？」

「なにいっ！？」
そこで小金井が口を開く。
「多分僕は情報の発信源の一つだと思うよ？　それに僕が知ってなかったらどうなるっていうんだよ。」
「彰が知らなかったら知らなくてもＯＫってルール、知らないのか？」
「初耳だね、だれだよ、そんなことを言ったのは……」
「オレ」
「……あのなぁ……」
半分呆れ顔の小金井の代わりに旭が話す。
「ということ。少しぐらい周囲の噂話に耳を傾けてみたほうがいいと思うわよ？　もっともあんまり気にしすぎるのもよくないけれど。」
やや冷めた目で榎戸に告げる旭。
「なんか悔しいな～」
「全くそうは見えないんだけどねぇ……」
小金井がツッコミをいれる。
「てかさぁ、結局文化祭の出し物はアレで決定？」
「なんでいつもいきなり話題を変えるかね？」
突如話題を変える榎戸にツッコむ小金井。小金井の反応から察するに、どうやら榎戸が何の脈絡もない話題を持ち出してくるのは『いつものこと』のようだ。
「まぁアレで決定じゃない？　今のところ大きな反対はないし。」
「そっか～、楽しみだな～♪」
「ちょっと！　私は賛成してないわよ！？」
旭が待ったとばかりに話に割り込む。
「それにまだ議決をとってないでしょう？」
小金井がその質問に答える。
「僕の予備調査だと、クラスの９５パーセントは賛成だよ？」
「そうなの！？」

「ちなみに反対してるのは旭さんと大戸だけね。」
「……反対派は圧倒的に不利ってことね……」
「てかよ～、旭はなんでそんなに嫌がってんだよ？」
「だ、だって！　アレをやるってことは！」
「まぁ旭さんの想像通りだと思うよ？　みんなが例外を認めるなんてのは……というかこの際だから言っちゃうけど、みんながこれを推した理由は旭さんと小見川さんにアレを着せるってのが半分だから。」
「なっ……」
旭が顔を真っ赤にして絶句しているが、とりあえず俺にとっては「アレ」とやらが何を指すのかを知る方が先だな。許せ、旭。　……忘れていたが、旭の隣の小見川も顔を真っ赤にしていた。
「榎戸、アレってなんだ？」
「アレって？　アレだよ。」
「……もうお前には何も聞かないことにする。」
「冗談だって！　いやマジで許してくれ！」
「……じゃあなんなんだよ。」
「彰！　バトンタッチ！」
「……自分から教える素振りを見せたのに、僕に丸投げってのはどうなんだい？」
「いや～、オレだとわかりやすく説明する自信がねぇ。」
「あのなぁ……」
小金井は若干白い目で榎戸を見つつも、俺に説明を始める。
「まぁ、要は十月の半ばに文化祭やるんだけど、そこの出し物でウチのクラスは『仮装喫茶』の名の下に『メイド喫茶』やろうか、って話になってるんだ。まぁ身の危険を感じた旭さんが強硬に反対してるんだけどね。」
「まだ決まったわけじゃないわよ！」
……なるほど、確かに強硬に反対している。
「じゃあ朗報、目下の議論は旭さんにメイド服を着せるか浴衣を着

せるかっていう風になってるって知ってた？」
「知らないわよ！　っていうか人がいないところで勝手に話を進めないでよ！」
「そんなこと言っても旭さんが話に入ってきたら意味ないじゃん。」
「うっ……確かに……」
納得するポイントがずれてないか？
「ちなみに小見川さんはメイド服で決定済みだから。」
「え……えええぇぇぇ！」
へー、小見川ってビックリしても泣きそうになるのか……ってこれは違うか。どう見てもさっき旭と榎戸に無茶な二択を迫られた時と同じ顔だし。
「というわけで旭さん、早めに腹を括ってもらえるとこっちとしても凄く助かるんだけどなぁ？」
「私は断固反対！」
小金井はため息をつくと、しょうがないといった風情で話を続ける。
「しょうがない、みんなとの約束だから、悪く思わないでよ？　旭さん。」
「な、なに！？」
小金井は一息ついて、旭以外の同席者に向かって口を開く。
「実はね、先週の金曜日……」
「わかったわ！　折れます！　折れるわよ！」
「うん、そういってもらえると助かるよ。じゃあこれで決定だね。早いとこ倉橋に教えてあげなきゃ。」
そういって、小金井は携帯電話をとりだすと、メールを打ち始める。
「よし、送信完了。」
天音が旭に話しかける。
「綾音ちゃん、だいじょうぶ、きっと似合うよ♪」
「……天音、私はそういうことを言ってるんじゃないのよ……」
もう諦めた表情で、しかも疲れた口調で話す旭。
「きっと楽しいのにな～……」

「こういうときはあなたのその性格がホント羨ましいわ……」
「世の中楽しまなきゃソンだよ！」
「……まさかあなたから世の中について言われるなんて思ってもみなかったわ……」
旭が完全に意気消沈モードになっているのを見かねてか、小見川が旭に声をかける。
「あ……綾音ちゃん、わたしも一緒だから……」
「……千尋、嫌なんだったらあなただけは助かるように交渉するけど？」
「だ、大丈夫だよ……それに綾音ちゃんだけにそんなことさせちゃ悪いもん……」
「気にしなくても大丈夫、折れたには折れたけど、こっちが着る服まで自由にさせる気はないから。」
……実は一番の被害者は小見川だったりするのか？
「小金井くん、悪いけど私は企画に賛成しただけよ！」
旭は小金井にそう宣言する。
「そんなことは分かってるよ。で、僕はどうすればいいのかな？」
「え？　どうするって、どういうこと？」
「徹底抗戦するんでしょ？　その手伝いがいるんじゃないの？」
「……いったい何を考えているの？」
「僕は確かに何とかこの企画を通す、とは言ったけど、その成立後に関しては何も言ってない。つまりクラスの味方をしようが旭さんたちの援護に回ろうが、それは僕の自由ってことだよ。」
「……あなたは敵なの？　それとも味方なの？」
「僕が旭さんの敵に回ると思う？」
「……そうだったわね、忘れてたわ。ごめんなさい。」
なにやら懐かしい思い出を思い返しているように微笑みながら謝る旭。
「な～んだなんだぁ？　お前ら裏でなに考えてんだ？」
……榎戸の辞書には『反省』とか『学習』という言葉は載っていな

いらしいな。
「別になんでもないわよ。」
「いや、なんかあんだろ。どうなんだ？　彰。」
「まぁノーコメントだね。」
「……隠すなよぅ！　オレとお前の仲じゃねえか！」
「悪いね、こればっかりは言えないんだよ。」
「ちぇ！　ならしょうがねえな。」
おお、榎戸がすぐに諦めた。
「さて、じゃあそろそろ戻ろうか。」
小金井がみんなにそう告げる。みんなの皿や弁当箱は既に空になっていた。
「天音、次の授業はなんだ？」
「英語だよ。」
「……英語かよ……」
「よーくん英語嫌いなの？」
「いや、別にそうじゃないけど。昼飯の後の語学系の授業は眠くなるんだよな……」
「やっぱり？　結構寝ちゃう人多いんだよね～。」
「……まぁそうだろうな。」
見れば小金井と榎戸は二人揃って大欠伸をしている。
「さて俊一、次は寝るか？」
「だな～、オレは今すぐにでも寝れるぜ？」
「まぁ教室について授業の頭の挨拶が終わるまでは起きてろよ。」
「それまで持つかな～。」
そんな会話をしている二人を旭がたしなめる。
「寝たら叩き起こすわよ？」
小金井と榎戸はお互いの顔を見て、ニヤリと笑うと、あらかじめ打ち合わせていたかのように、親指をグッと立て、全く同じ返答を、全く同時に言い放った。
『そしたらまた寝るまでよ！』

さすがの旭も返す言葉が見つからないようだ。

時計は、昼休みが残り五分を割っていることを示していた。

第5話　（昼休みの攻防）（後書き）

ぐはっ！
ものすごく久しぶりに更新しました！

何かもう忘れ去られてるんじゃないかとあせりつつ第5話を置いてきます。

ではまた近々？

第6話　（多数決、別名『数の暴力』）

さて、とっくに六時間目の授業は終わった。

では今何をしているのか？

それはだな……

「それじゃあ、この案でいいんだな？　後からの異論は認めないぞ？」

八街先生が生徒達に念を押す。

「特に旭、お前は最後まで反対してたらしいが、いいんだな？」

旭は半ば諦めたように答える。

「ええ、妥協せざるを得ませんでした。」

八街先生は、やや首を傾げつつも文化祭実行委員に号令を発する。

「倉橋、実行委員長として可決を宣言しろ。」

倉橋、と呼ばれた生徒はそれを受けて黒板の前に進む。そして教壇に上り、教卓に手をついて、高らかに宣言した。

『では、これをもってクラス出展を『仮装』喫茶と決定させて頂きます！！』

その瞬間、教室は喝采に包まれた。

『ご協力ありがとうございました！』

その拍手に応える倉橋こと文化祭実行委員長。そして、そのまま次

の議題を引っ張り出す。
『では、引き続いて役割の決定とその分担を決めたいと思います。こういった仕事がいるだろう、という意見のある方は挙手願います。』
真っ先に手を挙げたのは、なんと小金井だった。
『小金井くん、どうぞ。』
「まず表方と裏方に大きく分けるべきだと思う。」
『なるほど、では大きく分けます。』
実行委員長は黒板の真ん中に縦線を引き、右側に表方、左側に裏方と書いた。
『で、それからどうするんですか？』
「表方はまず接客担当、それから会計担当。その他にも当日宣伝要員が必要だと思う。」
実行委員長は、それらの役職を黒板の右側のスペースに書いてゆく。
「それから裏方、主に調理担当。それから皿洗い要員ってことで清掃担当も加えといて。」
今度は左側にそれらの役職名を書いていく。
「とりあえずそんな感じ。」
黒板を書き終えた実行委員長は、小金井に礼を告げる。
『どうもありがとうございました。他に意見があればぜひどうぞ。』
続いて様々なところで手が挙がり、意見が飛び交う。一通り役職が出揃ったところで、実行委員長は一旦書くのを止めた。
『さて、一通り役職が出揃ったので、今度は人数配分について議論したいところなのですが、そろそろ皆さんも帰りたくなってくる頃合いでしょうから、この続きは明日に持ち越したいと思います。本日はご協力ありがとうございました。また明日も引き続きご協力よろしくお願いします。』
拍手を浴びながら、実行委員長が自席に戻ると、さっきから教室の後ろで成り行きを見守っていた八街先生が教卓の前に戻ってくる。
「さて、んじゃちょっと遅くなってるから、面倒事はなし。特に問

題も起きてないからな。さて、旭、号令。」
先生の指示を受け、旭がクラスに号令をかける。
「起立！」
みんな椅子から立ち上がる。
「気をつけ、」
まぁ本当に姿勢を正すヤツはそんなにいないな。
「礼！」
そして、全員がお辞儀とともにお決まりの言葉を言う。
『さようなら～』
そして、教室がにわかに騒がしくなる。
「佐倉、机を下げて。」
小金井に催促された。　……なるほど、掃除があるからか。
促されるままに机を下げる。他の生徒も机を教室の後ろに動かし、
そこで帰り支度やらなんやらをしている。
そして、机を下げたことで教室の後ろに出現した机と椅子の森を抜
け出そうとしたところ、八街先生に声をかけられた。
『佐倉～、このあと職員室にこいよ～。一人で行くと寿命が縮まる
ってんだったら旭か小金井を連れてきても構わんぞ～。』
そして八街先生は教室を出て行った。
「佐倉君、私は仕事があるから連れていくなら小金井くんにしてち
ょうだい。」
「……いや、一人で行くから。」
「そう？　それならいいんだけど。」
そして旭は律儀に自分の机の上の荷物を整えると、小見川に何かを
ささやいて教室を出ていった。さて、小金井は何してんだ？
『サンキュー！　小金井！　お前のおかげだぜ！』
みれば先ほどの実行委員長と喋っていた。
「まぁ僕が協力できるのはここまでだよ。」
「いやいや、成立させてくれれば問題ない！　あとは俺がなんとか
する。」

「分かってるとは思うけど、あんまり旭さんに無茶な要求するなよ？　被害は全部僕に降りかかるんだから。」
「正直言って本当は旭さんにあんな格好やこんな格好をさせてみたいんだけど、そうすると今度はお前を敵に回さなきゃいけないからな～。そのあたりは諦めるさ。」
「どんな格好だよ……」
すると実行委員長は小金井に耳打ちする。
「……お前の趣味丸出しだな。」
「いや、実際多かったぜ？　こういう意見。」
「男の妄想を実現しようとするのは別に構わないんだけどさ、そのために犠牲になる女の子のことも考えてやれよ？」
「あ、これは女子からぜひやってみたいといって出た意見だぜ。」
「……は？」
「お前にしては珍しく処理落ちか？　実際本気でやるつもりらしいぜ。」
「……さいでっかい。好きにしてくれ。とりあえず僕を巻き込まなければどうでもいいから。」
「まぁ期待してくれって。今年の出店大賞は俺らで決まりだ！」
小金井はやれやれ、といった風に首をふると、そのまま実行委員長との話を止めようとしたが……
「ところで小金井、ぶっちゃけてくれた方がいいんだけど、旭さんとはどうなってんだ？」
実行委員長は話をやめるつもりはないらしい。
「どうなってるって、どういうこと？」
「だから文字通りだって。」
「なんにもないよ。」
「うそだろ！？　だって学校中でお前と旭さんが付き合ってるって噂になってるぜ？」
「噂は噂、それ以上でもそれ以下でもない。」
「まじで？」

「そうだよ、ってかその手の噂は今まで何回も流れてるじゃん。いい加減に信じるのは止めたら？」
「いや～、やっぱり信じたくなるって。人間だもの。」
「最後にその一言を付け加えるだけでなんか許してもいいかなって気分になるから止めてくれ。」
「わ～ったよ。ちぇっ、今度こそ本当かと思ったのによ～。」
「まずは噂の出所、そう判断するに至った根拠を調べた方がいいと思う。」
「怒るなって。てかいっそのこと告っちゃえよ。」
「……なんでそうなるかね……」
小金井は無理矢理実行委員長との話を切り上げると、そのまま教室のドアに向かう……っと、要件だけは伝えとかなくちゃな。
「小金井！」
小金井は足を止めてこちらを振り返る。
『なんだい？』
「ちょっと職員室行ってくるから、それ終わったら案内頼む！」
『わかった。僕はこのあとここに戻ってくるから、声かけて。』
そして小金井は教室を出ていった。
「天音、ちょっと職員室行ってくる。」
「りょ～か～い、じゃあ教室で待ってるから。」
「あいよ。」
教室を後にして職員室へ向かう。その途中で旭と出くわした。
「あら？　佐倉君？　そういえば職員室に呼ばれてたわね。」
「ああ、そうだよ。　……ところでさ、職員室に入るときってなんか嫌な感じにならないか？」
「そうかしら？　別に何も悪いことをしていないんだったら堂々としていればいいと思うわ。」
「……そうか。」
……なんか聞く相手を間違えた気がするな。この手のことは榎戸の方が気が合いそうな気がする……

それはともかく、俺は足早に職員室へ向かった。

第7話　（思いやりは時々重い）

俺は今、廊下を歩いて職員室に向かっている。なぜかって？　ついさっき教室で先生に職員室にくるように言われたからな。一応言っとくが、俺は別に何も悪いことはしてないぞ？

そして、職員室の前に着く。やっぱり気が向かない。確かに何も悪いことはしていないのだが。

「失礼しまーす。」

職員室に入ると、すぐに八街先生が俺を呼ぶ。

『お～、佐倉～、こっちだ～。』

職員室の真ん中に近いぐらいのところで八街先生が手を振っている。

「おし……どうだった？　クラスには慣れたか？　まぁ一日でそこまでは難しいだろうけどなぁ……。」

「いえ、大丈夫です。」

「そうか？　まぁ小金井と旭の二人がいりゃあ特に問題は起きないとは思うが。」

本当のところは、なんか溶け込みすぎてしまってむしろ怖いぐらいだ。質問攻めも一回こっきりだったし、その後はまるで俺が以前からいたようになっていた。　……ここまで自然に溶け込んでしまうとは、正直思っていなかった。しばらくは質問攻めに好奇の目線は覚悟していが、なんだか拍子抜けだ。

「さて、んじゃ本題に入ろうか。」

……本題は別にあるのか……

「ってもどうってことはないんだけどな。教科書は渡したし、下駄箱も割り当てたし、ロッカーももうあるだろ？」

「はい。小金井に教えてもらいました。」
「ならよし。それじゃあこれ、だ。」
そう言って先生はプリントの束を取り出した。
「これを渡しておく。ちょっと量があるから二・三日はここに置いてってもいいぞ。なんか分からないところがあったら旭なり小金井なりに聞いてくれ。」
先生からプリントを手渡される。ずいぶんどっさりとあるな……
……！　ちょ……重い！
「さて、佐倉、ちょっと。」
先生はもっと近くに寄るように手招きする。そして俺が先生のすぐそばまでくると、周りに聞こえないよう小さな声で話しだした。
「……お前のご家族のことだが、どうする？　言いたくても言えないんだったら俺から言ってもいいぞ？」
「……いえ、自分で言います。」
「……わかった。なるべくなら言わずに済めばいいんだが、たぶんそういうわけにはいかないとは思う。まぁもし言いにくかったらいつでも言ってくれ。」
「わかりました。」
すると先生は、屈めていた体を起こし、要件は終わった旨を伝えてきた。
「じゃあ気をつけて帰れよ？　ところで部活は入る気はあるのか？」
「いえ、今のところはありません。」
「そうか。まぁ興味があるなら小金井に言うといい。案内はしてくれると思うからな。」
「はい、ありがとうございました。」
「おう、じゃあまたな。」
そして職員室を後にする。そして、大量のプリントを抱えて廊下を歩いていると、向こうから小見川が歩いてくるのが見えた。
「あ……佐倉くん、そんなにプリント持ってどうしたの？」
「さっき八街先生に渡された。」

「そうなんだ……手伝ったほうがいい？」
「いや、いいよ。なんか悪いし。」
「遠慮しなくていいよ？」
……なんだろう、断るに断れない空気に……
「……じゃあちょっと頼むわ、なんか崩れそうだし。」
実際は両手でがっちり抑えれば問題ないが……
「てか何してたんだ？」
「ふぇ？　何って？」
「いや……あんな微妙な時間に廊下を歩いてたから。」
「あ……そういうこと。わたし今日は掃除当番だったから、その帰りだったの。」
「そういうことか。……ってか掃除当番がお前一人ってことはないよな？」
「あ、うん。みんなは先に行っちゃったから。」
「ずいぶん薄情だな……」
「そ……そんなことないよ。今日はいつもより早く終わってるし。」
「そうなのか？」
「うん、小金井くんが取り仕切ったからすぐに終わっちゃった。」
「なんじゃそりゃ……」
「小金井くんそういうことがすごく得意だから……」
「そういうことって？」
「掃除とかを早く終わらせること。綾音ちゃんはきっちりやるからあんまり早く終わらないんだけど、小金井くんは手を抜きつつきれいにするのがうまいから……」
手抜き……旭は嫌いそうな言葉だな……
「そんなに小金井は急いでたのか。」
「うん。佐倉くんが戻ってくる前に戻っておきたいからって、ほとんど一人でやっちゃったんだよ。そのほうが早いからって。」
「あいつ、意外と律儀だな……」

小見川にプリントを半分もってもらったまま教室に戻る。そこには既に戻っていた小金井と旭、それと榎戸、そして天音の姿があった。
「おっつかれ～、さすがに説教じゃねえよな？」
榎戸が笑いながら近づいてくる。
「ああ、プリントを渡された。てかこんなにあったのか？」
「あ～、たぶん一学期からのプリント全部だな、こりゃ。」

……そんなもん一気に渡すなよ……先生……

「でもさすがにそれを今日中に持って帰れってことはねえよな？」
「ああ、二、三日は置いといていいってさ。」
「まーそうなるだろうな。やっさん優しいし。」
「やっさん？」
「あ、センセーのあだ名な。」
「なんでそうなった？」
「八街、だからやっさん。」
「なんか納得した……」
「わかりやすいだろ？」
「まぁな。」
「あ、『やっさん』つってもヤ〇ザさんのことじゃないぞ？」
「んな物騒なものに間違えるようなあだ名をつけるなよ！」
「平気だって、それに勘違いするならそれはそれで面白いからいいんじゃね？」
「あんまよくないと思うんだけどな……」
「で、いつまで小見川にプリント持たせとくんだ？」
「あ。」
小見川はちょっと困ったような顔で、俺のプリントを持ったまま俺の斜め後ろに立っている。
「悪い。それと運んでくれてサンキューな。」
「あ、うん。大丈夫。」

小見川からプリントを受け取る。それを自分のロッカーに納めると、小金井が待ってましたとばかりに声をかけてくる。
「さて、じゃあ学校案内に行こうか。」
「ああ、頼むわ。」
「わたしも行く～！」
天音が突如参加を宣言した。
「じゃあオレも行く！」
続いて榎戸も。
「私もついていくわ。なんだか心配になってきたから……」
本気で心配そうな顔で旭も参加。
「じゃ……じゃあわたしも……」
小見川もおずおずと参加表明。
「結局全員参加かい……遠足じゃないよ？」
小金井はツッコみつつも教室の出口に向かって歩き始める。
そして学校案内ツアーが始まった。　……『ツアー』……なんか既に雲行きが怪しいな……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6491w/

明日のむこう

2011年11月17日19時02分発行